

街からこどもが消えた

長坂 典子

東京都母子保健サービスセンター

先日、新聞のコラム欄でこどもの数について弁護士さんが書いておられました。ちょっと紹介します。

「キツネは4匹、タヌキは6匹。こどもの数がそれ以下だと、親が子をなめ過ぎて子がうまく育たない」獣医さんの説だそうです。人間の場合は11人がちょうどだそうです。月経が始まり結婚して最初のこどもを産み母乳で育てると、産むのが3年間隔となり、閉経までに9人から11人というのが自然な数。そうすると甘やかされず、こどもたちだけで小社会をつくり、兄弟姉妹にもまれ、親からかわいがられ過ぎて駄目になることもなく育っていくというのです。

こどもの数が減ってきた今日では、なんとも羨ましいような話です。

「こどもは外で遊びなさい」母親の口ぐせともいえるこの言葉を聞かなくなったと同時に、こどもたちが外で遊ぶ姿を見かけなくなりました。街の中からこどもの声も消えました。

東京では1年間に1人のこどもも生まれない町さえ出てきています。大人だけ、しかも高齢者しかいない町のイメージは、西部劇に出てくる廃墟と化したところを考えてしまい寂しいものです。

かつての典型的な遊び場(原っぱや空き地)はビルやマンションに変わり、マンションの踊り場が格好の遊び場となっています。踊り場で遊ぶ母子は下へ降りるのが面倒といえます。

猫の額ほどの公園の隣は、幹線道路のように車の往来が激しく、排気ガス、交通事故の心配でゆっくりこどもを遊ばせることもできません。

東京や大阪といった大都市ばかりでなく、地方都市でも自然が急速に失われてしまい、こどもを育てにくくしています。

小さなこどもは生傷が絶えないものですが、最近包帯をしているこども、絆創膏をはっているこどもが少なくなりました。遊び方に様変わりが生じているのでしょうか。

こどもは遊ぶのが仕事、遊びながら大きくなっていくものだと思っていたのは、もう大昔のことになってしまったのでしょうか。

いまは、幼稚園から帰ってくるとお稽古事、塾通いとスケジュールがつまっています。「遊び時間がない」というはたらきバチみたいなこどもたちが大勢いるのです。

この春、私は機会を得てヨーロッパの国々を廻ってきました。日本と同じようにヨーロッパの国々も出生率が下がっています。それだけに子育て支援、環境づくりには力を入れているようです。今の日本のこどもたちの様子には驚かれました。

どこの国でも元気のいいこどもたちの声をたくさん耳にしました。特にスウェーデンでは、早朝からいたるところでベビーカーで赤ちゃんが散歩に出ている姿を見、これが合計特殊出生率1.53と2.13の違いなのだと強く感じさせられました。ゆったり子育てができる環境づくり、支援が国のレベルで行なわれているのです。

本格的な高齢社会に突入している日本においても、未来を担うこどもをより健康に、より健全に育てるための環境づくりをもっと真剣に考えなくてはなりません。